

会話と無関係なスマートフォン使用の特徴の検討

傳研究室 17L1030F 宍戸真奈美

1. はじめに

日常会話における会話の進行と無関係なスマートフォン使用は、他の参加者に「会話に参加する意識が低い」という印象を与える可能性があり、コミュニケーション上不適切な振る舞いとみなされかねない。本研究では、スマホの個人使用が実際の会話場面ではどのようなタイミングで生起するか観察し、その特徴を検討する。また、会話からスマホの個人使用へスムーズに移行するために使用者がどのような方法を用いているか、検討する。

2. 分析 1

2.1. 目的

会話中に個人使用が生起するタイミングを明らかにするため、実際の会話データで見られたスマホの個人使用について、会話への参加役割と話題の転換の有無という二つの観点で分類し、その特徴を検討した。

2.2. 方法

データ：『日本語日常会話コーパス』（モニター公開版）における三人会話データのうち、スマホの使用が見られる 11 データを使用した。後述する分類の結果、個人使用をした人は 13 人で、分析対象の個人使用は延べ 25 件であった。

手続き：まず、データ全体を参照し、ELAN を用いてスマホの使用範囲をアノテーションした。次に、各使用について個人使用か否かを分類した。その後、個人使用に分類されたスマホ使用を、使用者の参加役割と話題転換の有無について分類し、それぞれ集計した。

表 1. 参加役割の分類基準

参加役割	分類基準
話し手	使用者が発話
宛先	発話の直接の受け手
傍参加者	使用者以外の二者間で会話
語りの聞き手	他者の語り
発話なし	独り言のみの場面や、会話の間の沈黙
会話なし	長時間会話が行われていない場面

2.3. 結果と考察

自己の会話関与が低いと考えられる傍参加者時や発話なし時の方が、個人使用を開始するのにふさわしいと予想したが、個人使用の生起はどの参加役割の時点でも観察された。会話関与が高いと考えられる話し手時や宛先時にも個人使用が生起していることから、発話と個人使用は同時に行うことが可能であり、調整される必要がないのかもしれない。

一方、話題転換の有無ごとの個人使用の生起は、話題転換なし時が 21 回であるのに対し、話題転換あり時が 4 回と差が見られ、話題転換あり時の個人使用は全て発話なし時であった。このことから、その場で会話が活発に行われているような場面においては特に、話題の転換が行われるタイミングで使用することは避けられると考えられる。

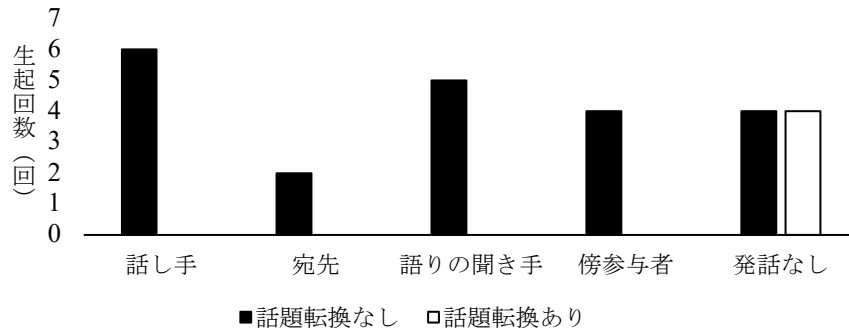


図 1. 個人使用の生起位置

3. 分析 2

3.1. 目的

会話から個人使用への移行方法や個人使用が生起するタイミングをより明らかにするため、使用者がスマホへ向ける視線と他の参加者から使用者に向けられている視線の情報を用いて、使用開始時の特徴を検討する。

3.2. 方法

データ：分析 1 と同様。

手続き：各個人使用の使用範囲について、使用者がスマホに視線を向けている範囲をアノテーションした。また、使用者が他の参加者から向けられている視線について、いずれかの参加者から視線が向けられている場合を視線あり、誰からも視線を向けられていない場合を視線なしとしてアノテーションした。このとき、個人使用開始前でスマホに視線を向けている間を志向期間、個人使用開始後でスマホに視線を向けていない間を準備期間、個人使用開始後でスマホに視線を向けている間を実行期間とした。その後、志向期間と準備期間の長さについて R を用いて集計した。また、志向期間/準備期間/実行期間の開始時点における、他の参加者から使用者に向けられている視線を集計した。

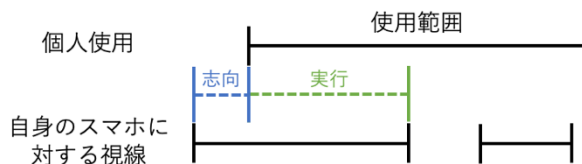


図 2. 個人使用開始前にスマホへ視線を向けていた場合

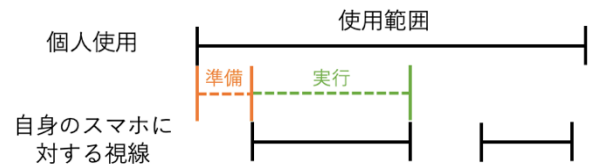


図 3. 個人使用開始後にスマホへ視線を向けた場合

3.3. 結果と考察

使用者は、個人使用の開始前後にスマホへ視線を向けていることが最も多かった。また、志向期間がある使用よりも準備期間がある使用のほうが多く見られた。このことから、準備期間がより円滑に個人使用へ移行する方法として機能している可能性が示唆された。

他の参加者から使用者に向けられている視線については、使用者が個人使用開始前にスマホへ視線を向けていた場合は「志向期間」開始時、使用開始後に視線を向けた場合は「実行期間」開始時に他の参加者から視線を向けられていることが少なかった。この結果から、他の参加者から視線を向けられているときにスマホへ視線を向けることがより避けられることが分かった。

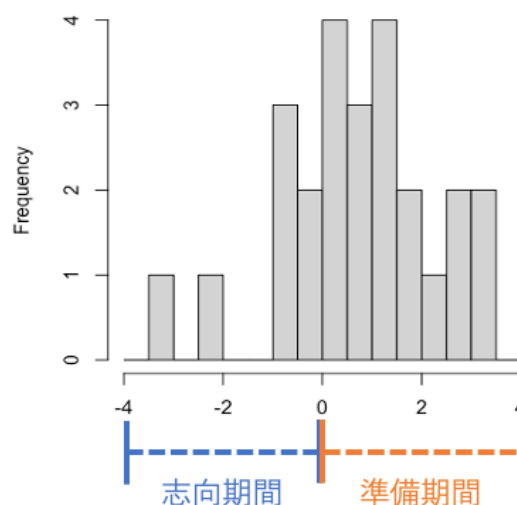


図 4. 志向期間/準備期間の長さの分布

使用者の視線のタイミング		他の参加者からの視線		計
		あり	なし	
個人使用開始前	志向開始	1	6	7
	実行開始	4	3	7
個人使用開始後	準備開始	6	12	18
	実行開始	3	15	18

表 2. 他の参加者から使用者に向けられている視線

4. 分析 3

4.1. 目的

分析 1・2 で明らかになった傾向から、個人使用を典型的な使用と典型的でない使用に分類し、使用時間と実行期間の長さには差があるか検討する。

4.2. 方法

データ：個人使用 25 件のうち、使用開始時点で参加者全員が会話に参加できる状態であった 14 件を用いた。

手続き：これまでの分析の結果から、典型的な使用の特徴を①話題転換なし時に個人使用を開始すること、②準備期間があること、③使用者がスマホへ視線を向ける時に他の参加者から視線を向けられていないことの 3 つとした。この 3 つの特徴全てを満たすものを典型的な個人使用とし、そうでないものを典型的でない個人使用として分類

した。最後に R を用いて、使用時間と個人使用開始後最初の実行期間の長さを算出し、可視化した。

4.3. 結果と考察

典型的な個人使用に分類された事例は 9 件、典型的でない個人使用に分類された事例は 5 件であった。使用時間と実行期間の長さともに、大きな差は見られなかったが、典型的でない個人使用群に比べて典型的な個人使用群のほうが短い傾向があった。また、典型的でない個人使用群より典型的な個人使用群の方がデータのばらつきが少なかった。典型的な使用の方が会話への参与に気を使っており、スマホ使用にかかる時間が短くなっていると考えられる。

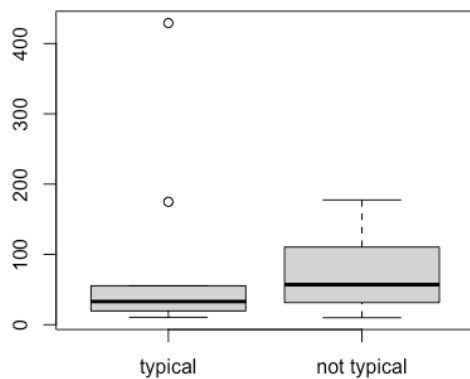


図 5. 使用時間の比較

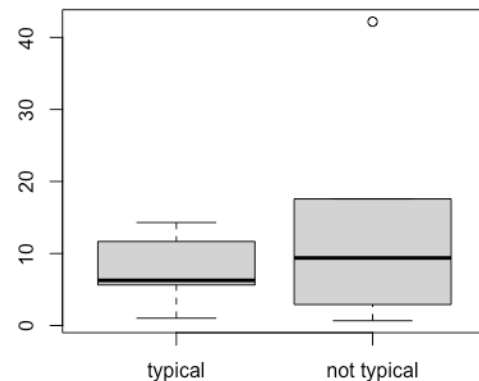


図 6. 実行期間の長さの比較

5. 総合考察

本研究では、スマホの個人使用が生起するタイミングや、会話から個人使用へ移行するための方法を検討した。分析 1 では、個人使用の生起に参与役割は影響しないこと、話題転換がない場面において個人使用が開始されやすいことが分かった。分析 2 では、準備期間がより円滑に個人使用へ移行する方法として用いられている可能性や、使用者は他の参与者から視線が向けられていない時にスマホへ視線を向ける傾向があることが示された。さらに分析 3 では、典型的な個人使用群のほうが使用時間や最初の実行期間の長さが短く、ばらつきも少なかった。これらのことから、個人使用者は会話への参与に配慮して個人使用を行っている可能性が示唆された。

しかし、典型的でない個人使用については会話の中でどのように使用が行われているか明らかになっていない。よって、今後は使用開始時点のみでなく使用範囲全体の行動も対象として分析することが求められる。また、本研究では三人会話のみを分析対象としたことによりデータ数が少なかったため、三人会話以外についても個人使用のデータを収集し、今回明らかになった傾向が適用できるか確認する必要があるだろう。